

大衆の暴力と革命の暴力の間にある裂け目は、大衆の自然成長性を否定し、党的な意識性を代償することによっては解決されえない。大衆の暴力を革命の暴力へ転化し、組織化する困難性こそ、革命の主要な問題であつて革命の全過程の課題そのものである。これを避ける事は政治組織にとって政治的指導の放棄そのもの、自らの存在の否定に他ならない。そして大衆の意識を肩がわりしようとする発想は、プロレタリア革命の基本理念の否定であり、政治思想として見ればブルジョア政治思想（民主主義からファシズムまで含む）への屈服である。彼らがプロレタリア大衆の暴力の外に革命の暴力を形成しようと試みたのは山岳アジトを軸とする赤軍政策という政策を許すものなどである。彼らは都市を離れて山へもつたことは、単に治政当局による、都市のアパート・ローラー戦車に追われたという以上の意味を持つ。

軍事問題に限定して論じた場合でも、革命の軍事とは大衆暴力との関係において成立するものであつて、党も革命軍とそれを離れては存続しない。そして現代日本の大衆の暴力反乱とは、都市大衆の暴力が牽制である以上、山へもつた場合は大衆暴力への説得を意図する。彼らもまた農村が革命运換地たりうるとは考へてゐないが、彼らは軍事訓練の容易さ、機力からの離れやすさという技術的要因から山岳アジトを設定したことば明らかである。まさしくこれの発想において彼らは軍事の問題を技術的見地から、すなわち社会的諸条件を固定的にとらえ、そのうえで技術的解決を以てする基本的態度を持つてゐた事が明らかである。都市から追われるという状況そのものの意味がまったく彼らにわかつてゐない。

政治的に見るかぎり、そして赤軍派の内部状況の本当のところは、ハイジャックにせよ暴動にせよ、政治的敗北過程、政治的逃亡過程以外ではなかつた、これらを評価する

事はまったく出来ない。これらが、政治的社會的状況を反映するものであり、その本質を暴露する役に立つたとしても、風俗とは常にそのようなものであり、なんらその事は評価の対象ではないし、同情の対象でもない。

他方、彼らの行動をブチブル急進主義であるとして批判する日共・革マル・青解の諸派がいる。だしかし、連合赤軍派はブチブル急進主義の組織には相違ないであろう。だがそのような批判は單なるレッテル貼りに過ぎず批判者自身がそうではない証拠にはならない。ブチブル急進主義の持つ社会的意味、革命過程における意義をみる點のない教条主義に過ぎない。かれらは、ブチブル急進主義でない急進主義が現在どこに存在しているかを指摘する事は出來ないであろう。形態上は、都市大衆の自然発生の派閥にはブチブル、あるいはランプロの急進主義的派閥以上ものでない事は自明の事なのであり、それ以外いかなる急進的プロレタリアートが存在し、闇つているかを指摘してみればよいのだ。いいかえれば、何をもつてプロレタリア階級と呼ぶのかが問題なのだ。

我々は資本制秩序によって整備されたブルジョア階級配置、そなえられる資本制労働者の対立が革命运営であるとは考へないこの関係は対立であると同時に相互に補完的であり、根本的対立は不可能である。我々は、そのようなブルジョア階級編成としての労働者階級が革命运の主体とも考へていな。ランプロの急進主義の安定性の解体を模擬として、労働者階級がブルジョア社会における安定的位置を喪失し、ブルジョアの秩序の一端を担いなくなつた時にはじめて、プロレタリアートは躍在化し、革命运の組織化される前兆を形成すると考えている。

大衆暴力で我々が注目するのは、大衆の暴力叛乱の中にはじめて、プロレタリアートの登場を見る事が出来るからであり、ブルジョア階級編成の解体を見事か出来るからで

ある。かつて共産主義者同盟における、我々と、マルクス主義戦線派の諸君との分派闘争における論点の一つに階級組合評議があつた。彼らは労働組合を階級的組織として、全面的に肯定的評価を与え、そこにおけるヘゴモニーの問題、大衆支配力を階級的主導にすえた、党絶対一派形成という理論であつた。それに對し、我々は、プロレタリアートの階級形成の問題を、我々の組合とのヘゴモニーの問題に乘沙少する事なく、組合の大衆権力の低下そのものに、ブルジョア秩序の大衆権力の低下、プロレタリアートの登場の模倣、新たな階級配置の可能性を既成の組織形態にとらわれず検討する事を主張した。

ブチブル急進主義者達は、マルクス主義のプロレタリアートの労働組合との組織化過程およびその革命性と、ブルジョア階級編成としての現代的階級内における活動とを同一のものとみる誤りを犯しているのである。

我々はこのような既存の階級配置の分解の表現として、既存し、新たなるプロレタリアートの共同求める大衆の動きとしての大衆投票に注目するのである。それゆえ、我々にとつて暴力、あるいは軍事の問題は、階級情勢を革命运技術上の問題として解決しようしたり、ともかく機力への闘争姿勢の問題として武装闘争を行おう事でもなく、いかかる日時期に来たる武装闘争を行おう事を確立し、その時期の判定要因を述べる事が要求されているのでもない。さらには現代社会の条件では革命运は可能かどうかを論ずる事でももわからん。我に存する大衆の暴力が日本の革命运に對つてかかる意味を持ち、革命运の発展にどのような力を持つかを明らかにし、革命运を組織する事である。ブルジョアジーの軍事力、暴力を解体しプロレタリアートの軍事力、暴力を形成してゆく事は革命运の本質的課題であつて技術レベルにおいてのみ取り扱つてはならない事で

ある。大衆の「暴力」とは現代社会において一つの与件であつて、「暴力」を選ぶか否かという選択の問題ではないのである。

Ⅲ 党と軍隊

— 階級闘争にとって合法。 —

非合法とは何か —

大衆暴力の限界を技術およびその扱い手たる軍事の問題として解決しようとする発想は大衆の革命运能の不信を根拠にしている事を前章で我々は指摘した。

我々は党と大衆の革命运運動における二元的構造の矛盾を、現時点において解消しようとした赤軍派、戦旗派、叛旗派等の一切の企てに反対してきた。我々は党と大衆とを二元的であると言うのは、指導するものと、指導されるものという古典的区分によつているのではない。目ざめのものと、目めまいのものという区別でもない。このよう差異とは、本質的には連続的な過程、自然成長の過程であつて、實的差異を形成するものではないと我々は考へている。党と革命运のプロレタリアートの違いはその政治的意識性の差にあるのではない。赤軍派、戦旗派の諸君にこれを理解してからこそ、党の政治的指導性を党的大衆支配力と混同したり、党と大衆の矛盾を、『軍』・『党軍』・『共同体』などによって解決してみせたりしては、これらの誤謬の主張する閉鎖的闘争共同体における等質的、あるいは連続的な人間關係は、なんら党と大衆の矛盾を解決するものではなく、それを回避しているにすぎない。革命运の大衆組織と党組織の違いは組織原理、結合様式の違いとして存在している。党は革命运の一手段、道具で

あり、そのようなものとして組織される事への意識的参加、すなわちを、政治的技術者、手段へと限定するという意識性にその組織原理が存在する。党的な意識性とは革命运の必然性、あるいは革命运の寸手とどれだけ距離するかという意味での意識性を理解されるべきではない。そしてプロレタリアートの自然成長性と、党的な意識化とは同一の過程である。プロレタリアートがプロレタリアートとして闘争過程に勤務され、組織され、政治的意識性を身につける事は、革命运運動そのものであり、プロレタリアートの能力の形成すなわち階級形成そのものである。これに対し、プロレタリアートが党に組織され、政治的意識を高めようとも、それ自身が革命运の前駆、階級形成を意識するものではなく、単に党が力を付けてゐる限り、党は革命运過程に対してはプロレタリアートの手段としての存在をすき、その活動の結果がプロレタリアートの政治的前進に役立てられて、革命运になどかの寄与したことになるのである。党への大衆の組織化は、それが革命运としてあらうとも、かくらうとも革命运の前駆であるとする、日共から革マス、赤軍に至る考へは逆立をしている。

日共・革マル・連合赤軍を貫く、組織内批判者、他党派を反革命として抹殺せんとするリンクの伝統は革命运を二重化するに至る組織的、革命运論を紹介している。革命运においても、徹底逃亡、指令違反等は「戦争」そのものの論理として処刑が必然となる。（だが見当を大衆が「合法化」するには、それが大衆に支持された公的権力によるもの場合である事に注意よ。）そして党と革命运の同一性が存在する以上、組織の絶対性と、それからはずれたものを敵とする事も必然となるのである。すなわち革命运は組織の内側にのみ存在し、組織の外側は反革命領域であるとする考へが必然的に導かれる。革命运の論理が実現化する過程は、その組織が置かれた主

觀的状況がいかなるものであるかによつて異なるであろうし、階級集団における精神錯亂的状況ももちろん起つうる。だがそのような状況にあっても狂氣が済清を起したのではなく正義の論理がそれを可能にし、狂氣が存在したところで、それに色どりをそえたにすぎない。

革命运の全過程、全構造において党は大衆を指導するものであるが、大衆は党によって指導されるものであるとする考えは、党をプロレタリア階級の全てにわたる指導者であるとする事であり、結果として、党によってプロレタリア階級は代表され、党によって革命运は代表される事になり、党への批判者は革命运への批判者、敵対者となる。この論理構造を変える事なしには、スターリン主義的腐済の再発は避け難いであろう。彼らの党の位置は大衆の指導者であるという事で、分離されるに至るが、専門家には区別され、専門家としての指導性をもつて判斷には区別されではない。指導と被指導は運動の充率としての機械的分業以上よりではないこゝれはあらゆる運動について則るものである。前衛党の運営概念自体が党的であるに大衆の運営概念である事と意味する。大衆と一体のものである事が実は前提とされている。このよう事は虚構である。革命运を目指す党と、現体制を撲滅する大衆が一体となるのは革命运の高揚する一瞬であつて、それに至る過程においては、両者は原則的に断絶しているのが当然である。このかぎりでは、革命运の間に至るまでは、党は大衆に開かれてはいないが、それゆえ党は大衆を代表すると主張するいかなる根拠ももっていない。党への反対を反革命であるとする根拠ももしていないのである。さらに党といふ存在 자체、共産主義革命に對つては矛盾である。なぜならば党とはあくまでも政治の手段、専門家集団であつて、政治がプロフェッショナルであるようなこのようなり方そのものが革命运の目的とは矛盾する。そして革命运とは、プロレタリアート大衆が政治に参加する事により、

ルジョアの一大衆不在の革命运過程の解体中で可能となるものであり、革命运の闘争は同時に党としての党の自己解体であり、大衆と合一する闘争である。その時に党は自己の解体と分离する事は大衆ではなく、革命运の大衆指導となり、同時に党の党たる性格は解消するのである。我々はそのような闘争を願うものではあるが、それは大衆の革命运の起きたくではあるが、それには大衆の革命运の起きたくではあるが、それは大衆の革命运の起きたくでは不可能なのである。我々は革命运の政治的手段として、大衆の間の道具としての機能を果す事で現時点においては専門家ではない事を示しているのである。革命运に至るが、党は大衆に命令される事になり、党への批判者は革命运への批判者、敵対者となる。この論理構造を変える事なしには、スターリン主義的腐済の再発は避け難いであろう。彼らの党の位置は大衆の指導者であるという事で、分離されるに至るが、専門家には区別され、専門家としての指導性をもつて判斷には区別されではない。指導と被指導は運動の充率としての機械的分業以上よりではないこゝれはあらゆる運動について則るものである。前衛党の運営概念自体が党的であるに大衆の運営概念である事と意味する。大衆と一体のものである事が実は前提とされている。このよう事は虚構である。革命运を目指す党と、現体制を撲滅する大衆が一体となるのは革命运の高揚する一瞬であつて、それに至る過程においては、両者は原則的に断絶しているのが当然である。このかぎりでは、革命运の間に至るまでは、党は大衆に開かれてはいないが、それゆえ党は大衆を代表すると主張するいかなる根拠ももっていない。党への反対を反革命であるとする根拠ももしていないのである。さらに党といふ存在 자체、共産主義革命に對つては矛盾である。なぜならば党とはあくまでも政治の手段、専門家集団であつて、政治がプロフェッショナルであるようなこのようなり方そのものが革命运の目的とは矛盾する。そして革命运とは、プロレタリアート大衆が政治に参加する事により、

ルジョアの一大衆不在の革命运過程の解体中で可能となるものであり、革命运の闘争は同時に党としての党の自己解体であり、大衆と合一する闘争である。その時に党は自己の解体と分离する事は大衆ではなく、革命运の大衆指導となり、同時に党の党たる性格は解消するのである。我々はそのような闘争を願うものではあるが、それは大衆の革命运の起きたくではあるが、それには大衆の革命运の起きたくではあるが、それは大衆の革命运の起きたくでは不可能なのである。我々は革命运の政治的手段として、大衆の間の道具としての機能を果す事で現時点においては専門家ではない事を示しているのである。革命运に至るが、党は大衆に命令される事になり、党への批判者は革命运への批判者、敵対者となる。この論理構造を変える事なしには、スターリン主義的腐済の再発は避け難いであろう。彼らの党の位置は大衆の指導者であるという事で、分離されるに至るが、専門家には区別され、専門家としての指導性をもつて判斷には区別されではない。指導と被指導は運動の充率としての機械的分業以上よりではないこゝれはあらゆる運動について則るものである。前衛党の運営概念自体が党的であるに大衆の運営概念である事と意味する。大衆と一体のものである事が実は前提とされている。このよう事は虚構である。革命运を目指す党と、現体制を撲滅する大衆が一体となるのは革命运の高揚する一瞬であつて、それに至る過程においては、両者は原則的に断絶しているのが当然である。このかぎりでは、革命运の間に至るまでは、党は大衆に開かれてはいないが、それゆえ党は大衆を代表すると主張するいかなる根拠ももっていない。党への反対を反革命であるとする根拠ももしていないのである。さらに党といふ存在 자체、共産主義革命に對つては矛盾である。なぜならば党とはあくまでも政治の手段、専門家集団であつて、政治がプロフェッショナルであるようなこのようなり方そのものが革命运の目的とは矛盾する。そして革命运とは、プロレタリアート大衆が政治に参加する事により、

人間に対しては寛容であり、原則ではない。このような内と外の便り、いわばはブルジョア国家能力の側の設定する合法と非合法の区分に対応している。それゆえにこそ内部の人間は決して外部の人間に再びなるかは許されない。彼らの用語で言えば、「戦士」は「人民」になる事は許されないし、「戦士」が「人民」になる事は反革命である。なぜならば、外部の人間となる事はブルジョアの合法の人間にことなる事であり、ブルカードの向う側へこちらの構造を持つて行う事であり、非合法の領域・革命の内部の領域が犯され、反革命的行為となるのである。かくして「人民」は永遠にお客様として、革命の外部に隠れ、革命は彼らが独占する。リント殺人の彼らの原理でも骨筋でもなく、通用の失敗でもなく、当然の結果である。このような内と外の論理そのものが解剖される事なしには、連合赤軍派リント殺人事件を批判する事は不可能である。

我々はこれまで述べてきた事で明かになるように、わが反対国家権力という事を軸として階級闘争をしない。ブルジョア階級は国家権力を軸として見、その間での闘いの刻々動く闘いの前線を革命と反革命の境であると考える。それは一般的には決める事ができないものである。そのため、革命と反革命の境すなわちブルタリアードとつての合法と非合法の境とは無関係である。ブルタリア大衆の闘いであろうと、党的活動であろうと、それはブルジョアの合法と非合法の領域を含むのである。党、軍あるいは第一線のいずれであろうと、非合法の領域に限られる事はない。大衆組織の活動が合法の枠内に止まらねばならぬ理由はない。合法と言い、非法と言つても、それは階級的力闘争からブルジョアジーが決めた事であつて、大衆の闘いによつて変化するものであつて、階級的闘いの前進はその枠を越す事に常に意味する。いいか

えれば、ブルタリア大衆の闘いこそが、自らの合法性を打ちし、闘つてゆく。党的側がそれにやめあらかじめることは、かくしてブルジョアの設定する固定化された合法・非法の区別に対するすんなり込んでゆく事であり、反革命的である。連合赤軍派リントが反革命であるのは、それが人民裁判でなく党の裁判であるがゆえに、ブルタリア大衆はそれを支持する理由もなく、さらには、大衆不信、大衆への恐怖を底に持つ同志不信の手で死刑であるがゆえに、大衆にとって説明する事出來ないものであり、さらにそれが同志の喪失、反革命の增大のみを惹起するからである。このような死刑を拒否する事は、赤軍派の存在を知らざる者まいとあらゆる大衆の権利に属する。そしてこのようだ大衆の拒絶の権利の存否は、革命を志す者の初めからの法的条件のけである。逆にそれ故にまた、大衆の信頼を得るという事実が、革命組織者にとって巨大な意義を持たうるのである。

我々は、党の闘い、あるいは党的闘争と階級闘争をしない。

ブルタリア階級は国家権力を軸として見、その間での闘いの刻々動く闘いの前線を革命と反革命の境であると考える。それは一般的には決める事ができないものである。そのため、革命と反革命の境すなわちブルタリアードとつての合法と非合法の境とは無関係である。ブルタリア大衆の闘いであろうと、党的活動であろうと、それはブルジョアの合法と非合法の領域を含むのである。党、軍あるいは第一線のいずれであろうと、非合法の領域に限られる事はない。大衆組織の活動が合法の枠内に止まらねばならぬ理由はない。合法と言い、非法と言つても、それは階級的力闘争からブルジョアジーが決めた事であつて、大衆の闘いによつて変化するものであつて、階級的闘いの前進はその枠を越す事に常に意味する。いいか

IV 新左翼運動過渡期の終焉と 左翼反対派運動の克服

以上のようにみてくるとき、連合赤軍派とは、新左翼もまた受けついでいた旧左翼の母

班が無能な形で現われたものである。党を大衆の上に立てるもの、選民とする思想の破綻である。我々は、このような結果を防ぐために連合赤軍派を生み出した新左翼、なんづく共産主義者同盟の内包してきた内部の思想的本質を開き、自己批判しなければならないと考えている。

共産主義者同盟は二つの性格を持つて成立した。一つは日本共产党に対する左翼反対派としてであり、それは単に日共との対立ではなく、日共そのものも本來持つた社民に対する左翼反対派の思想の継承であった。第二回に於ける大衆闘争への抑止並びに引きまわしに対する、大衆の奮闘の代弁、開拓大衆の本派であるとする。

この二年余新左翼は大衆の戦闘エネルギーの体現者として闘つてきました。そのことによつて、社会的な秩序の確立の在を蘇生化し大衆暴力の登場を促進してきた。そのかぎりで左翼純正主義（代行主義）と革命人民の本派主義の対立は、未だ決定的なものではなかった。そうであるが故に、左翼反対派思想との闘いは本格的ではなく、反対派性が温存される根柢を有していた。だが、現在、このような左翼反対派思想は隠れの妨害に完全に転化している。大衆の暴力、大衆の革命遂行能力への不信は、大衆の暴力をおこしめ一振りの左翼にして代行しようすることによつて闘う大衆を戦闘から追放している。

この二年余の行動は反革命である。

現時点の階級闘争は、反革命政治包囲網の形成にみられるように表面的には階級闘争の冬である。だからわれわれは田野の予言者、弘立せる革命者に止まつてはならないであつて、「法と秩序」は政治の表面、社会の表面を覆つていろが、大衆の暴力化・社会秩序の空洞化は深まつてゐるのであり、われわれは大衆との結合能力を持つ政治集団として、大胆に大衆と共に、大衆に奉仕し開拓ねばならないのである。敵権力が大衆を組織化しようとしている今こそ、大衆を信頼し、大衆の道具としてわれわれは開拓ねばならないのである。

だが、この十余年の闘いのうちで、大衆内部の前衛でありかつ大衆の外にある党である

この十余年の新左翼の闘いは、このような左翼の基本思想の過渡期として存在したのである。六十年安保闘争においては大衆は戦後民主主義体制の最左翼として、市民主義徹左翼として、戦略的価値観と論理の内にあつてその枠をそれ自身の展開によつて打ち破ろうとした闘いつた。この枠自体が自滅することを前提とする大衆暴力闘争の時代へと、移つてゆく中で、新左翼のはたすべき歴史的役割もまた変化してきただのである。

この十余年新左翼は大衆の戦闘エネルギーの体現者として闘つてきました。そのことによつて、社会的な秩序の確立の在を蘇生化し大衆暴力の登場を促進してきた。そのかぎりで左翼純正主義（代行主義）と革命人民の本派主義の対立は、未だ決定的なものではなかった。そうであるが故に、左翼反対派思想との闘いは本格的ではなく、反対派性が温存される根柢を有していた。だが、現在、このような左翼反対派思想は隠れの妨害に完全に転化している。大衆の暴力、大衆の革命遂行能力への不信は、大衆の暴力をおこしめ一振りの左翼にして代行しようすることによつて闘う大衆を戦闘から追放している。

この二年余の行動は反革命である。

現時点の階級闘争は、反革命政治包囲網の形成にみられるように表面的には階級闘争の冬である。だからわれわれは田野の予言者、弘立せる革命者に止まつてはならないであつて、「法と秩序」は政治の表面、社会の表面を覆つていろが、大衆の暴力化・社会秩序の空洞化は深まつてゐるのであり、われわれは大衆との結合能力を持つ政治集団として、大胆に大衆と共に、大衆に奉仕し開拓ねばならないのである。敵権力が大衆を組織化しようとしている今こそ、大衆を信頼し、大衆の道具としてわれわれは開拓ねばならないのである。

だが、この十余年の闘いのうちで、大衆内部の前衛でありかつ大衆の外にある党である

といつた腰抜けな大衆と新左翼の結合関係は完全に終つた。大衆に対してセクト的でないという共産主義者同盟の大衆的シンパシーも終りをついた。まさしく新左翼の一代は終つたのである。このことを自覚しない党派は失墜するであろう。

大衆は代々木、社民・新左翼を問はず、大衆とは無関係のセクトとして見はじめた。我々はこのようないい気の争い勝負にはならないのである。すなわち左翼を大衆に対して示すことではなく、大衆が革命に向う際の有用性・効用性の問題として大衆は党派を見えており、新左翼に対する近親感・寛容はもはや、存在しない。

我々は左翼純正主義。その裏をえとしての左翼反対派思想を完全に捨て去り、人民の革命の大道の真直中において、文字通り、意識的に大衆と結合し、「何をやっているか」ではなく、「どうか」としての闘いである。大衆は結合しているといふが如く、「大衆の闘いに協力しなければならないのである。

我々の自己批判とは、何よりも、共産主義者同盟こそが、左翼反対派思想をその内部から追放し、根絶する諸条件を持ち、大衆もまたそれを期待していくにもかかわらず、それが極端的な形容である連合赤軍派を生み出し、大衆の期待を背いたことに対してもある。

またここで大衆暴力の大統合と拡大という方向に背いて、セクトの小さな枠に閉じこもろうとする敗北主義の発生を撲滅を浴びておかなければならぬのである。

すなわち連合赤軍派の誤りは連合したことによる批判である。これは仙人派からも連合赤軍の内部からも発せられている後ろ向きの批判・精算主義である。もし連合赤軍が眞に革命の軍隊であつたのなら、連合は必然であり当然であった。そうであつたが故にそれは悲劇となつたのである。革命の軍隊は人民の権力機関であつて党派によって分断さ

れるべきものではない。革命の軍隊は党的政治路線の一体化によってではなく、革命の戦闘行為そのものによって統合されねばならないものである。そのかぎりで軍の連合・統一は諂ひではない。それは他の領域の問題ではなくブルタリア大衆の領域の問題である。連合赤軍派の軍隊は、党的軍隊の連合によってぎねのを入る軍隊の統一と錯覚したことによる重圧に耐えられたからであり、党的統一の一枚岩化が要求され、それを軍隊の論理によつて行なおうとしたことにより、ブルジョアの内部秩序・同志の秩序ではなく、権力的・ヨーロピアンによる秩序のみが可能となつたのである。

亦軍隊の政治思想はその必然としてその軍隊をブルジョア的な軍隊にしてしまつた。それは指導部と一般兵士の関係をブルジョア的ヒエラルキーに転化していつたことが、リンチ事件の過程が明らかになると、暴露されつつある。これは軍隊を党的私兵とする思想から必然化されたのである。技術としての軍隊である以上、技術の思想（ブルジョア思想）は軍隊の内部に浸透し、革命の構造をつき崩すのである。

我々が革命の軍隊といふとき、それは大衆の革命化の表現としてあり、その実験はブルジョアの軍隊の革命そのものを運営する。

軍隊の内部はヒエラルキー・自律革命されなければならないのである。それ故我々は、革命の軍隊とは、赤軍=正規軍を中心とするべきではない。赤軍=民兵の系譜こそ本質的なものであつて、それこそ軍隊それ自体の革命を体現するものであると考える。それによつてこそ、人民への抑止としての暴力の上場が可能となるのである。（ブルジョアの暴力の否定は、暴力の虚偽にすぎない）、國家権力の上場が可能となるのである。このような架構を持たない軍隊は革命の軍隊ではなく、私兵集団にすぎない。

我々は暴力の問題を手段の選択の問題とし

てなく、大衆暴力の顕在化という社会的な条件の問題としてとらえ、それに依拠し、ブルタリアートの権力に向けて、闘争を大衆的に拡大深化させてゆくであらう。これらを通じて我々は、我々の自己批判を現実化してゆくことをと/or>プロレタリア同志諸君は大衆の中にあつて、その先頭に立ち、ブルタリアートの権力に向けて、闘争を大衆的に拡大深化させてゆくであらう。これらを通じて我々は、我々の自己批判を現実化してゆくことをと

4.17 新入生歓迎集会

挨拶 松本礼二
講演 広松涉
場所 牛込公会堂
(5時開場)
主催 社会主義学生同盟

5.6 共産同政治集会

第三世界の革命闘争と
世界革命への展望
——キーパル帰国報告——
松本礼二
場所 豊島振興会館
(5時開場)

り開いた所にある。国家性力一暴力部隊を部分的、局部的に殺戮し滅ぼすまでも、この事実は、70年代階級斗争の基本その関連された人民の暴力の解放と拡大を通じ、その暴力を封殺された既左翼、自衛団等の暴力の暴力の反対性と敵対性を暴露し、解体する事の中、現状の打開と、プロレタリアトーリーの階級への形成を保障するのである。我々に問われていたものは、以上のようなプロレタリアーの暴力力量の増強と拡大でありその暴力を全般的に階級形態とする共産主義者の暴力との結合を、階級斗争として中央階級斗争一マックス・ストライキの展開の過程に勝ち取つて居た事であつた。

人民の暴力の結合においてのみ可能であり、その運動的広がりの下に、全国的広がりをおさへていく事が問題となつた。この三線螺爆争が切掛けた、すぐれた先行性で、四月統一地方選挙、又秋明における「佐賀政府打倒」等の国民運動に包括されるかにええた。この二うちの国民運動階級への傾斜は、ペトラ・ムンド革命が突きした革命性に対するばかりか「沖縄返還を目前にした現在」、ブルジョアジーから「次は尖閣列島だ」という中国の領有権の問題を問題にした国民運動の形成と、日本階級斗争経験における国民運動への懸念に対して一切斗争を組織し得ず第一主義を転換せんとして来るのである。

この歴史的争いの新局面は、空論主義者の存続根拠をも根底的に崩してしまった。すなわち、大衆の自然流動の潮流に背伸びし軍事による先発性、突出性を政治指揮と考えていつた彼らにあっては、最早、その手本としてもある軍の力量、軍隊の暴力の力質に何ら自信を抱く理由からして得ないとにより、政治指揮の放棄と、待期主義、マルクス主義を落としてしまっている。故に彼らにあつては自ら野球の統一と、その暴力の内がバへの転用しかなくなるのだ。他方、大衆斗争の持続的暴動に全く耳を貸さる部分にあつては、その暴力の問題を(ブレイタリート)の歴史的争いの手本一般へ転落させ戦略的脅威の城壁へおし停め、その左翼性に追従し、党派の援助争斗、内輪的争奪主義を落とす。議会主導の国民運動へ大きく傾斜して来ている。すなわちこれが三回目の争いである現れた「農民の土地防衛支援」(とうしきうじょひ)によるよき表れされており、それも代表されよう。三回目農民が生活の糧と土地の防衛を通じ明らかにしていつた国権保護の本質で、町閑開拓名を借りて帝國主義的社會再編の実は、そのアルジョマジーの存立基盤であり市民社会秩序においては、絶出走出来ないものとして、帝国主義者等との斗争は、彼らの存立基盤をつき崩した

人民の暴力的結合においてのみ可能であり、その運動的広がりの下に、全国的な広かりをおさへはづく事が求められた。この三里塚闘争が切って入った、すぐれた先行性を、四月続一地方選舉、又秋篠宮における「佐藤政府打倒」等の国民運動に包絡されるかにみえた。このよきな国民運動は軸線的・ペトナム革命闘争が突き立つた革命性に対するばかりか「ソ連反覆を目前にした現在」、ブルジョアシアンから「次は尖閣列島だ」という中国との領有権の権利問題を頭につけた国民運動の形成と、日本社会が終極的に抱く国民運動への期待に対して一切斗争を相繋げし得ず、一主義主導をあんしんして来ている。

米、ソの平和共存による政治的世界分割の意味は政治的な外大陸による階級斗争の延長で、その枠内における各帝国主義の確立であった。この実体は米・ソにおけるナショナルイマジストの世界的追求であり、収奪を可能とする後進国経済の再構造は、後進国問題が異なる原素の問題ではなく、それを可動せしめる、社会成形が帝国主義の世界体制に適合性を持つ形でくらるることであるため単純機力か外縁形でつくられるのではなく、アーティファクツ、又は手工业者、がそこまで深入りすることなくしては世界の解決たり得ない。「開発略歴」の実体こそその点において機力そのものであることを認むべしである。

この帝国主義の世界支配に対し抜いていいる、インンドシア改革策における「民族」は、日本帝国主義本国との関係に於ける「民族」ではなく、帝国主義者により創られた「国民」を肯定し定し、帝國主義世界体制の解体へ向う民族解放斗争が直接的性別を表現しているのである。この中には日本帝國主義者が直面している「日米経済競争」や沖縄返還を前にしたレアードの訪日により明らかにされた次回防の実体、→この事実は

クソンの外交文書により裏づけられている一等の問題は「日本帝國主義の国際脅威の不十分性」とそこにおけるエコノミック・アーミル暴力であり、この二つの問題が主な構成問題である。日本を主導する帝國主義は、自らを世界最強と持つ日本を、第一歩アジアの活動力・足を踏み入れざるを得なくなっているのである。いにまようと、日本帝國主義も進歩を遂げて「世界」へ関係するが不可能で、日本帝國主義も又自らの内部に重複的な第三世界の問題をかかえ込まざるをえき、「沖縄、八管」等の問題は帝國が「世界」に關係するため通らねばならぬ闇門としてある。この様な中で沖縄の返還と同時に辯出されている尖島列島の帰属問題は、彼らがブルジョア理論上で、一つの、日本帝國主義の領有権の主張を代弁してみせたとい、又「社会主义中国」への帰属を主張したりすることではない。後援団、「国民族」に直接的に国境を確定し、東洋アジアの再構築と向う帝國主義者の権益配分政策を確定し又それが広汎な国民運動として形成されている実質とそれへの対応における我々の位置規定が権力斗争の問題として明確化することである。

沖縄返還の問題は、以上のような革命斗争の世界性と、又、現在進行する日本帝国主義の社会再編の問題をも、沖縄人の全島的決起により兼も鋭角的に表現している。沖縄戦争勃発後は沖縄から遣せられた「アリカモだめだがヤマトチユードもだめだ」という失意の念は、単に平和幻想、日本への復讐に対する失望だけでなく、「東南アジア再編へ向う」日本の権力重心再構築基地の問題」と自治体等の再編を通した沖縄の地域開拓第一再編の実在に対する全局的抗議でもある。地域開発と、沖縄経済の發展のためにも更裏主席を支持する革新部分の本土資本の流れが沖縄の自然的破壊、第一次産業社会から労働力の分離を強調して推進し、本土における若労働者の大部分の流亡、又、本土に

おける差別支配の構造化という事実以外の何ものでもなく、この帝国主義再編の進行に於ける秩序転、旧左翼、国民運動主導者の反階級的役割をも先頭に現れてきているのである。この中にあつて新左翼の限界は、そのプログラマティックな政治批判のみではなく、国民運動における特有主張と、差別支配の構造化を通じた、ソクダ等が始めとする革命運動政治員との模底的対決と、森戻裁で向こう始陥的任務に無自觉である。//

以上、指摘してきたように、「左」への右の利見立政の敗北は明確であら。しかし、現在帝国主義者の権力再編の筋的転換と、その所持的攻撃の筋にあつて、われわれは革へ彼らに対する批判的ための批判にとどまり、「苦笑」にふけつたりすることは出来ない。再度ブルジョアジーの攻撃を抱きしめる、抜いてゆくための陸型の一派として後藤らを参加させてゆくことである。その過程で革命再編の獲得をすすめすしてゆく広範な統一戦線の問題であると私は考へる。その階級的成熟は容認的にはある。

わが同盟は、この前の帝国主義の動向の実体を世界的視野で過渡期世界の帝国主義再編と

して把握しつゝ、国内的には社会再編、権力再編として規定した。それが、69年の秋から「マルクシズム」が政治的対応を避け、行政的対応として出てくることにに対し、社会的反乱と結合し、全般的に中央地盤・東北地方の学園の結成における政治的反乱としてマルクシズムの政治=議会主義の種をうち砕り、大衆的土俵をつくり出したことこそがマルクシズムの行政的偏位と、政の無能さをうちやぶるところができるのであり、中央権力闘争=マッセンストの結合こそが秋の間、において議会主義の大躍進をこなす。大眾の前進と前衛としてむちうる歓徹的爆なのだ」と提起した。そこにおける社会再編、権力再編とは「諫め後資本主義社会が支配の根柢をしてきた諫め後民主主義の風化と、その分解が新しい質の關い=「社会

革命的もの「尊皇民主主義の従事者」等々を大膽的な暴力的反乱として呼びおこし日本帝國主義の敗政的・社会的のダメーモニのゆきりに對し、「行政的」「財政的」首筋を把化さるやうに起るる政治的、文部省の安定を保證せんとする帝國主義の運動をしてきて。それが今、6ヶ月後、ブルジョアジーは「尊皇民主主義の孚合と憲法」に依頼した、「社會秩序の破壊が防護か否か」といふ正直問題をブルジョアリー派將軍の名で「自國政府」に請辯して現れられてゐた。われわれの北は、このブルジョアジーの対抗的危機の際に對応することなく、安寄・津浦連合のブルジョアの政策次第、それは政治修程主義の愚者の歎をすることなく、草率的敗北を必成化させていってしまつたのが政治思想一政治指導の北の界限についてであつた。

（二）一九三〇年正月の支那事變、即ち支那事變は、北洋政府の倒幕と並んで、その

それへ、わが四五年の内政の出来事は、革命の原則によつて、「革命は人民」事業であつて革命に關する軍事、武装は基本的で、大衆武装に目を持つことであることを認證したのである。第一章によつて「革命の代行」は許さない、これが革命の原則である。現実にその點は三選舉問題の9・16を示した。共產主義者同盟の14年間にわたる闘いは、革命は物的問題であり、権力問題を一旦に躊躇して踏み込まることなく、大衆運動のなかで働く権力問題を提起し、その実践の先頭に立ってきたことである。

われわれはこの間「戦略とは、階級闘争の大化にとどまることなく、帝國主義階級統治体制の打倒へと向つてゐるのである。その事が即ち軍の軍事的・指揮、國家の政治化をして之を文獻秩序の暴力的再編成として、地政、社會問題の強烈的暴力であり、以後階級闘争の形態的・進歩と大衆の生存形式の変化の政治表現として、大衆衆営による革命戦争に対する人民内部の反革命階級の粗糲化として進行させていく。軍事的統轄における階級統一と、「人々運動は領有者、その権威、再編の方向がどこにあるかをあらわしている。

(分析については「ロード」10号の学問関西協論文集)。日本支配者階級の攻撃

現実選択における大衆との結合環として存在している」と規定し、略奪戦略に暴力問題である、敵対形態を包み込ませ、組織的暴力、駆動的具体化、運動戦略、敵動的具体化を、帝國主義者の強権=第一軍事力再構成に致し、実践していく。〔詳細は本文を参照してほしい〕この基本は決してかわらない。

問題は最初に指摘したように、帝國主義の歴史的・政治的・階級的背景なり。日本を主導

が、「戦後民主主義」に依拠していることは、自からの革命の現実性をベトナムの革命性と、世界的な大衆の暴力闘争に見、その大衆暴力に較めて依頼出来なかつた部分にとつては説明の要因となっている。この「戦後民主主義」に依拠した連隊は帝国主義対立とアジア革命勢力の包囲のなかにあって、民族的抑止効用を發揮してくる要素であり、帝国主義連隊は日本体制によって、アーリア・ジヨン主義連隊が日本体制によって、アーリア・ジヨン

¹⁶ 義の体力再編の質的転換に対し、日本左翼は「主権国民運動具体体制において、またノルショ

アジーの展望せざる得ない国民经济の確立とともに、その「オロヨガ」現状のあるである。それ故、6年冬休場でした「自由国民」の政治的性格と、現在が形成されている人民内部の反革命部隊「黄翼勢力」は異なる。つまりは、政治性格を異にしてきてはいることは明らかである。この間の「連合赤軍」事件に対する、支援者階級の執ようなまでの政治宣伝は改革次第（または社会行会等含め）を「アカ」として大震でナメりさせることによる。大震のものもかつ資本家社会への不満と暴力の渦浪との結合の分析として徹底的に推進されてきた。共産共社公明党・マツヨミ・小市民・大家族、町内会、勤労組合、大学等々、一休となつた「アカ」狩り、「刀狩り」こそ権力反発の質的転換として類似する例である。

この支配者階級・ブルジョアジーの階級的矛盾激化は、日本革命的容貌の成熟を意味するのである。確かに政府危機は、一貫して進行している。日中交戦回復、4次防、沖縄「密約」、そして「外務省秘書監査報漏事件」等々が日本の民衆の階級化と促進してあらわれ、「諒會」における多数支配の形骸化にハク車をかけてきている。野党的立場も自ら民衆とのそれと並ぶことはなく、政治過程の空白化は増大している。しかし、これらは、革命の原則を確認したのものによっては問題とされることはないとない。この事は、我々が三里塚暴動、沖縄紛争と諸々の戦いで明らかにしてきよう。而し、沖縄紛争を「返還阻止」か「即時阻止」=「平素還」か等々の「政策」次元の綱いに反対し、日本帝国主義の社会、権力再構造への頑いとして懲りたる位置を行き、各個別敵戦のそれへの猛力をあげた闘いとしてしてなってきた事で明確にされ得ている。

わが問屋は7月10年秋のように詠ふて「各々の戦敵の大衆運動は、常にその段階にあって権力運動が問題される時期に到達している。それ故に、権力とは大衆暴力を革命暴力とし

て不斷に人民が獲得してゆくことである。その中核をとして大衆的治向即共産主義者同盟を再構成よ、「」。この事は第二次三里塚斗争9・16にあって、武装した大衆の反乱の中、国民党力を引き抜き込み崩壊してゆくことを、日本革命の現状的形態を端的に示した。その後のブルジョアジーの混乱と動亂こそが三里塚暴動が革革命であることをの感觉得あるとの點をなす。三里塚が社會的實物的条件にぐぐまれておるやうな官僚主義論争等は「ボーラー」著した言語活動であり、革革命論では詳述せられぬ事である。今、三里塚のほか、社会的・實物的条件は、現在の市民社会部隊にある、ブルジョアジーの危機は、それへの反攻政策である。

二、数ヶ月、とりわけ三里塚闘争以来、大衆運動の各戦線へ、内部に併力問題が問われながらも、からずの統義論と、支配階級層の前述した攻撃の前に挙げられ分析され、混沌としている。「三里塚闘争も、入管闘争も、基盤・反軍閥闘争も、住民闘争も、保安法闘争も、破法闘争もあります。我々は各々の戦線でガンバーパーティ」では、革命闘争での初期主張もはめはめない。決して、各戦線で夜詫ひ抜いている同志説を語べつする意味でいつているのではない。各戦線で聞かれている併力問題が間質であるが故に、現在の併力再燃に對応し抜くわがわれの戦略が同時に、同質性をもつて各戦線で討議され实践されねばならない。各戦線をもなう事で、自らの党派性とする時代は終つた。

第一に、各戦線をブルジョアジーの攻勢への迎撃をなす、ブルテリヤ併力を包括し広範な統一戦線として再構築してゆくことを日本革命の火急の任務である。この事は、6年～8年6月の衆議院選挙（革新）闘争からくすりつけられたからも、その戦後支配の環をうちやわづつてきた大衆の政治表現としての暴力の自然発生のものもブルジョアジーの攻撃から防衛し、反撃してゆくための重

要な点である。
全国の同志諸君、// とりわけ学生戦線の同志
諸君、// 大衆武装の拠点を形成し、ブルジョ
アジー＝支配階級への反撃を開始せよ。
われわれは、共産主義者同盟＝大衆政治同
盟の再建を更にとり、それへの実践的連帯を
なすことを確認したい。

（略）

ローテ 第14号 (￥5.0円)

編集・発行 = ローテ編集局

連絡先 = 044-92-2578

(明大生田学館内 山田良雄様付)

(仮)